



真剣な眼差しで、工藤選手の指示を聞く子供たち

KUDO FAMILY SOCCER CLINIC

工藤ファミリー・サッカークリニック

バンクーバーにて開催

“工藤壮人選手が
バンクーバーに帰って来た！”

ークリニックに参加した小学生の言葉ー

2016年シーズンMLS（メジャー・リーグ・サッカー）のバンクーバーホワイ トキャップスに在籍し、昨 シーズンからJリーグのサ ンフレッチェ広島で活躍して いる工藤壮人選手によるサッ カークリニック（メディアアス ポンサー…バンクーバー新 報）が、バンクーバーで2日 間（2017年12月16、17日） 開催された（3日目の23日 は、雪の影響でフィールドコ ンディションが悪く、残念な がら中止）。

バンクーバーに住む子供た ちにとつて、元日本代表で現 役のプロサッカー選手に直接 指導してもらう機会はとても 稀なこと。ましてや工藤選手 は、こちらのサッカー事情を 理解し、日本との相違点も分 かつていたので、クリニックに 参加する子供たちだけでなく 保護者の方々にとつても期待 が大きいことが、クリニック 開始前から感じられた。そし て待ちに待ったクリニックが 始まると、12月の寒空を忘れ るほど、瞬く間に過ぎていつ た濃密な時間となった。

学年別で実施されたクリ ニックだったが、子供の年齢 にかかわらず工藤選手が伝え たいことは、いたってシンプ ルなものだった。『ボールをし かり止める』、『そのボールを 狙ったところへ蹴る』。その2 点の当たり前のことを、より 正確にできるように練習して いく。

最初は、コーチの大人から 止めやすい場所へ配給されて いたボールも、時間が進むに つれ、大きく跳ねたボールだつ



コーチチームのコーナーキック時、子供たちはとっさの判断で壁を作り、工藤選手も思わず笑みがこぼれる

たり、よく見ていないとどこへ来るかわからないボールが配給され出し、子供たちはボールの行方に集中した。眼差しも真剣なものに変わって いくのが分かった。止めたボー ルを狙ったところへ蹴る練習 も、単純にコーチへパスする ことから、受けたボールを指 定の枠内までドリブルで進み、 シュートしてゴールを狙う練 習へと、実践する内容が難し くなつていった。真剣な表情 で課題に取り組む子供たち を、カメラのファインダー越 しに追っていたが、短い時間 で子供たちが上達しているの がよく分かった。工藤選手は クリニック中、フィールド内 を休むことなく動き回り、子

供たちひとりひとりのプレー をじっくり見て、声を掛けて いた。

後半にはミニゲームが行わ れ、子供たちを2チームに分 けて試合をしたあと、クリニッ クの最後は、子供チーム対工 藤選手らコーチチームとの試 合。参加している子供たちは、 地元サッカークラブに入っ ている子もいれば、これを機 会にサッカーを楽しんでくれ たら、という親の思いで参加 したサッカー初心者の子もい たが、どの子もチームの勝利 のため、一生懸命にボールを 追っている姿を見られたのは 印象的だった。

そして、子供たちと一緒に プレーする工藤選手の表情

は、ホワイトキャップス在籍 時の試合中にフィールドで見 せていた表情と、とても似て いるという発見もあった。リー グの試合でも、子供たちとの ミニゲームでも、どんな立場 でも、工藤選手はサッカーが 好きで好きでしようがないの だろう。

工藤選手いわく、子供の頃 は「特に足が早いわけでもな く、体格が大きいわけでもな いのに、サッカーが大好きで いつもボールを蹴っていた」 とのこと。その幼少時の壮人 少年のように、サッカーにの めり込み、今回の参加者の中 から、いつの日かプロサッカー 選手が出るのでは、という期 待が持てるクリニックとなつ た。それほど、子供たちがボー ルを追う眼が工藤選手と同じ く真剣で、うれしそうだった。

クリニック1日目は肌寒く、 2日目は冷たい雨にもかかわらず、クリニック終了後には、 見守っていた大人たちを含め サッカーフィールドにいた全 員が大きな達成感を感じ、と ても満足気だった。グループ 写真の参加者の表情からも、 それが伝わってくる。帰り際 には「バンクーバーに来てく れて、ありがとう」「準備運 動のランニングから、とても 楽しかった」「また一緒にボー ルを蹴っているの教えてほ しいです」「来年も実施してほ しいです」「Today is the best day of my whole entire life」。そんな言葉を工藤選手 に掛け名残惜しそうにフィー ルドを後にしていった。



小学4年～6年生のサッカークリニック



小学1年～3年生のサッカークリニック